

〔特別寄稿〕

関東における浄土真宗研究の現状と課題・展望

筑波大学名誉教授 今井雅晴

一、関東伝道研究の重要性

人の一生はさまざまである。すぐれた救いの教えを会得して、それを密かに守って一生を終える人もいれば、その教えを多くの人々に伝えて一生を過ごす人もいる。鎌倉時代に生きた親鸞は後者の一人であった。

親鸞の生きる姿勢は、『正像末浄土和讃』の前に置かれた「夢告讃」に、「弥陀の本願信すべし」とあり、『歎異抄』第二章に、「たとひ法然聖人にすかされまひらせて念仏して、地獄におちたりとも、更に後悔すべからずさくらふ」とあること、そして『正像末浄土和讃』『正像末法和讃』の最後に、「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」とあることで明確である。阿弥陀如来への信心・報謝とともに、師匠への信頼・報謝がその姿勢である。

親鸞の一生は、住んでいた所によって四つの時期に区分することができる。誕生から三十五歳までの京都・比叡山時代、三十五歳から四十二歳までの越後時代、四十二歳から六十歳までの関東時代、六十歳から九十歳までの再びの京都時代である。

最初の京都・比叡山時代は、法然という生涯の師匠に出会い、専修念仏の教義を知り、その学びを深めた時期であり、また妻惠信尼を得た時期でもある。越後時代は師匠・先輩から離れた孤独の学びを深めつつ、武士・農民・

山村民・漁民等の生産生活を知って伝道方法に工夫をこらした時期。関東時代は伝道の実践を広く推し進め、その成果をあげた時期。最後の再びの京都時代は、教義を確認しつつ伝道も進めた時期。以上のように見ると、関東は親鸞の伝道の工夫・成果面で非常に重要な地域であったといえよう。^①

二、現代社会の課題を背景にした研究の重要性

第二次大戦後の歴史学界を主導したのは唯物史観であった。人類の歴史は原始共同制社会・古代奴隷制社会・中世農奴制社会・近代資本制社会と移り、最後は共産制社会になる、それが歴史の法則であるというものであった。近代社会では人々は資本家と労働者・農民すなわち民衆に分けられ、民衆は権力者である資本家と戦ってその搾取から解放されるべきであるとされた。そのころの貧しい日本社会の中で、多くの人たちが自分を民衆として規定し、権力者と戦って本来得るべき収入を奪い返そうという呼びかけに共鳴していた。

親鸞の七百回忌は昭和三十六年（一九六一）であった。その前後、昭和二〇年代から四〇年代にかけて、親鸞伝と浄土真宗史の研究も教団内外の研究者が全力を挙げて進めたが、その多くは前述の風潮の影響下になされていた。権力者と戦う親鸞。関東の荒野をさまよいつつ民衆を導く親鸞。親鸞も貧しかった、権力者と戦った、その中で人々に救いの念仏を説いた。私たちががんばろう、とその時期には思えたのである。私はその時期の、その風潮を否定するものではまったくない。

しかしながら社会の状況と課題は少しずつ変化する。七百回忌から数十年過ぎ、七百五十回忌も平成二十四年（二〇一三）、現在ではもうその先に進みつつある。親鸞の伝記も見直すべきいくつもの事柄がある。例えば親鸞は権力者と戦う人物という根拠は『教行信証』の「主上臣下、法に背き義に違し、忿りをなし怨を結ぶ」という文で

ある。しかしこれは後鳥羽上皇が刑法に抛らずに法然以下を処断したことに抗議したに過ぎないという有力な見解が出た。³⁾ 執筆の時期も上皇が権力を失い、隠岐に流されてから三年後である。

親鸞は野の聖という見方も改めなければなるまい。親鸞は関東において宇都宮頼綱という大豪族、および妻惠信尼以下の家族に守られて伝道活動をしていたのである。頼綱は執権北条時政の娘と結婚した鎌倉幕府の有力者である。また法然の門弟で実信房蓮生と称した、親鸞の弟子でもある。法然没後は西山の証空に教えを受け続けた。そして鎌倉時代は他人の領地に夫婦と子どもたちが無断で住み着くことができる社会ではない。親鸞一家は頼綱の招きまたは承諾によつて稲田に住んだと判断すべきである。⁴⁾

さらに、親鸞の稲田草庵は稲田神社の境内と推定される地域にある。そこに長期間住んだことは、いわゆる神祇不拜について再検討を迫るものである。『親鸞伝絵（御伝鈔）』には親鸞が箱根権現を訪問、と載せているし、⁵⁾ 鹿島神宮参詣もよく説かれている。

第二次大戦後、親鸞の門弟は武士か農民かという論争があった。ここでは農民という見解が圧倒的であった。しかしこれも見直されるべきである。後に二十四輩第一とされた性信は鹿島神宮の神主一族の出身、第二の真仏は大内氏の出身、第三の順信は鹿島神宮の神主出身、第四の乗然はその弟、第五の信楽は相馬義清という武士という。当時の神主は武士である。以上を見ただけでも、親鸞の門弟、少なくとも有力門弟は武士であったことがわかる。農民ではない。かつて武士の罪業感が注目されたこともあったが、⁶⁾ あらためて検討されるべきである。親鸞の関東での伝道対象は明確に見直さなければならぬ。

それに、関東は荒野ではなかった。平安時代の『延喜式』によれば、常陸国は大国であった。『延喜式』では全国六十数ヶ国を、収入の多い順に大国・上国・中国・下国に四分類していた。その大国であるから、常陸国は農産物豊かな地域であったのである。

また十世紀から十三世紀ころの日本列島はそれ以前より一・五度から三度程度気温が高かったという。このため東日本の農業生産量は飛躍的に増加した。⁷⁾ 西日本ではそれが日照り・干ばつとなって現われ、飢饉が頻発し、⁸⁾ 軍事力の低下を招いた。西日本が基盤の平家が東日本の源頼朝に敗れたのはこれが原因だったのではないかという見解もある。⁹⁾

常陸国は豊かだった。それなら常陸国に住む人々は特別に無知ということはあるまい。また関東の鎌倉には幕府があり、都市鎌倉は武士の希望の都であった。なおかつ、親鸞が関東へ入ってから七年後の承久元年（一二二二）の承久の乱において、幕府軍は朝廷軍を打ち破り、朝廷と幕府の力関係を逆転させ、幕府は日本支配の主導権を獲得した。数年後、親鸞は第三代執権北条泰時に大事業の一切経校合を委任されている。¹⁰⁾

三、今後に向けての研究課題

さてこれからの親鸞伝と浄土真宗の研究においては、史料の綿密な検討によって揺るぎない史実の確定に努力しつつ、現代の社会的課題の観点から研究視点を確認していく必要がある。すべての学問は現在と今後の社会の充実と発展のためにある。親鸞と浄土真宗の研究も然りである。現代の日本では心の問題や差別を含めた人間関係の改善が大きな課題となっている。また世界から戦争をなくし平和な社会を築くことも大きな課題である。このような観点から、親鸞の説く信心と報謝の思想は非常に重要と言わねばならない。お互いに信頼する心と感謝する心である。

親鸞は関東でいかに伝道したか。呪術などにもどのように対処したか。¹¹⁾ 一般の人が恐れた鬼などにもどのように対応したか。人は理屈ではなかなか動かない。親鸞は家族とよい家庭生活を築き、それに接した関東の人々が親鸞

に近づき、その生活が信心と報謝にあることを知ってその教えを受け入れたと私は考えている。

また第二次大戦後の社会的課題が完全に解決されたとは思わないが、少なくとも現代は支配階級と被支配階級の戦いの社会ではない。権力者の弾圧に対する戦いが特筆される時代ではない。何よりも平和を求める時代ではないか。「弾圧」「戦い」を強調する研究視点ではなく、すべての人々に手を差し伸べる教えを説いた親鸞の姿が究明されるべきである。

以上の現状認識に立ち、以下に今後の研究課題を述べたい。第一に、関東はどのような風土であり、いかなる生活と信仰があったかを先入観なしに検討したい。親鸞の活動の解明に役立つ諸県市町村史はすでに存在している⁽¹³⁾。その検討を基礎に新たに調査する必要がある⁽¹⁴⁾。親鸞伝承についても、その意義を把握していきたい⁽¹⁵⁾。

第二に、関東の人々はいかなる生活意識と信仰を持っていたか。特に武士の日常にある殺人への罪悪感から墮地獄の恐れなどに、あらためて注目しなければなるまい。悪人正機説など、生活の実感を背景にして研究していくべきである。

第三に、親鸞はどのような態度で伝道したか。それに関し『歎異抄』第二章の「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」という記事が注目される。教義を説明しても、それを受ける受けないは相手に任せた。親鸞の人格の解明もさらに重要である。

第四に、伝道のためには、家庭生活が大いに効果があったと推定される。普通の生活をしている親鸞が説く教えだからこそ、説得力があったのであろう。恵信尼の生活と信仰の検討も重要である。当時は夫唱婦随の社会ではなく、教団の指導がある状況下にもない。「親鸞の妻恵信尼の信仰は夫と同一であったはず」と最初から決めつけるのは誤りである。

第五に、関東の門弟たちはどのように親鸞の教えを受け止め、育み、伝えていったか。¹⁶⁾たとえば、二十四輩第一の性信が率いた横曾根門徒には、思想的にも世俗的にも真言宗の影響が濃厚である。同じく第二の真仏の高田門徒には明星天子（虚空蔵菩薩）の信仰と善光寺信仰の影響が強い。第三の順信の鹿島門徒には鹿島信仰が無視できない。

また親鸞が八十代のころ、息子善鸞を関東に派遣した。その目的は関東で念仏の問題が発生したからであろうと、研究者の意見はほぼ一致している。そして善鸞は怪しげな教えを説き父に背いたとして糾弾されてきた。では関東でどのような問題があったのか。その検討はなされてきただろうか。善鸞一人を悪者にして検討を終わらせてしまっている状況を、私たちは反省しなければなるまい。

四、展 望

関東は親鸞が本格的に、そして十八年という長期間にわたって伝道して成果をあげ、さらには『教行信証』を執筆した重要な地域である。関東に根ざした研究を行ない、関東から発信していく意欲を持つことが親鸞伝と浄土真宗研究にとって重要である。その研究は先入観念なしに、思い込みなしに進めていけば、大きな成果が上がるであろう。¹⁷⁾

【註】

(1) 拙著『親鸞と東国門徒』（吉川弘文館、一九九九年）・『親鸞と東国』（同、二〇一三年）・『関東の親鸞シリーズ』1～15（真宗文化センター、二〇〇九～二〇一六年）

- (2) 笠原一男『親鸞と東国農民』(山川出版社、一九五七年)、赤松俊秀『親鸞』(吉川弘文館、一九六一年)、宮崎円遵『初期真宗の研究』(同朋舎、一九七一年)など。それらを受けて、平松令三『親鸞』(吉川弘文館、一九九八年)
- (3) 上横手雅敬『鎌倉時代の権力と制度』、「建永の法難について」(思文閣、二〇〇八年)
- (4) 拙著『四十二歳の親鸞・続―関東の住所―』(真宗文化センター、二〇〇九年)
- (5) 拙著『親鸞聖人と箱根権現』(自照社出版、二〇一五年)
- (6) 家永三郎『親鸞の宗教の成立に関する思想的考察』、『中世仏教思想史研究』(法蔵館、一九四七年)
- (7) 山本武夫『気候の語る日本の歴史』(そしえて、一九七六年)
- (8) 松井健編『日本の自然 2 カラーシリーズ 日本の風土』(平凡社、一九八七年)
- (9) 田家康『気候で読み解く日本の歴史』(日本経済新聞出版社、二〇一三年)
- (10) 拙著『五十六歳の親鸞・続―一切経校合―』(真宗文化センター、二〇一六年)
- (11) 小山聡子『親鸞の信仰と呪術―病氣治療と臨終行儀―』(吉川弘文館、二〇一三年)
- (12) 南条了瑛『親鸞の伝道―鬼の恐怖に対して―』、『東国真宗』第二号(東国真宗研究所、二〇一六年)
- (13) 『栃木県史』通史編3 中世(栃木県、一九八四年)、『茨城県史』中世編(茨城県、一九八六年)、『板倉町史』通史 上巻(板倉町、一九八六年)、『笠間市史』上巻(笠間市、一九九三年)、『小田原町史』通史編 原始古代中世(小田原市、一九九八年)、『二宮町史』通史編1 古代中世(二宮町、二〇〇八年)など。それらに基づき、近年では拙著『茨城と親鸞』(茨城新聞社、二〇〇八年)、同『親鸞の風景』(監修、茨城新聞社、二〇〇九年)、同『下野と親鸞』(自照社出版、二〇一二年)、同『親鸞聖人 関東と旧跡ガイド』(監修、編集は「親鸞聖人」旧跡ガイド編集委員会、二〇一一年)、『特別展 親鸞―茨城滞在20年の軌跡―』(茨城県立歴史館、二〇一一年)
- (14) 橋本順正『親鸞一家と佐賀の研究―板倉町について』、『親鸞の水脈』特別号(真宗文化センター、二〇一七年)
- (15) 拙著『親鸞の伝承と史実』(法蔵館、二〇一四年)
- (16) 板敷真純『初期真宗における往生の理解―東国門徒を中心に』、『東洋学研究』第五三三号、東洋大学東洋学研究所、二〇一六年)、植野英夫『初期真宗門徒における師と弟子―門徒形成の契機として―』、『中世文化と浄土真宗』今井雅晴博士古希記念論文集編集委員会編、思文閣出版、二〇一二年)、飛田英世『真宗三尊者』、『初期真宗門徒における師と弟子―門徒形成の契機として―』(同前)
- (17) なお関東時代も含めた親鸞の一生について、拙稿『浄土真宗史研究の方向性』、『親鸞の水脈』特別号(真宗文化センター、二〇一七年)で述べた。